

中学校英語科授業における英語「反応力」育成プログラムの開発¹

山森 直人*, 宮川 恵**, 宮本 健一**, 安達 昇吾**, 遠藤 麻央**,
木下 泰徳**, 田所 美穂**, 河村 祥**, 久米 明**, 高岡 慶輔**,
寺尾 順子**, 目崎 美香**, 大和 慧**

(キーワード：中学校英語科授業，反応力，瞬発力，持久力，CAN-DO リスト)

1. はじめに

1. 1 問題の所在とこれまでの研究

現行の中学校学習指導要領（2008年3月改訂）の外国語科（英語）では，前指導要領に比べ，指導する単語数を除き，文法事項等の指導内容に大きな変化はないが，英語授業の年間時間数が各学年で，それまでの105時間から140時間，週時間数で表すと3時間から4時間へ増加されている。これは「言語活動の充実を通じて言語材料の定着を図るとともに，コミュニケーション能力の一層の育成」（文部科学省，2008a）を意図してのことである。ここに増やされた年間35時間，週あたり1時間に何をすべきか，という課題が浮かび上がる。

また，英語授業の各単元において生徒が当該単元の学習事項（文法項目や語彙等）を理解したとしても，ある程度の期間が経過した段階で，それまでの学習事項を統合的に活用してコミュニケーションができるか，ということに関しては疑問が残るところである。各単元における学習事項を単元毎に積み上げていくというこれまでなされてきた学習形態の可能性と限界に関わる問題である。

以上の課題・問題に対応すべく，2008年度から2012年度にかけて鳴門教育大学大学院の授業科目「教育実践フィールド研究」において「中学校英語科授業のプラス1時間にどのように対応するかー英語スキルアップトレーニング法の開発ー」と題する継続研究を行ってきた（山森他，2011；山森他，2012；山森他，2013；山森他，2014）。この研究では，英語の文構造・時制・人称を駆使するための知識・技能を英語力の「体幹」と称し，個別に学んだ文法事項を統合して使いこなすための英語力の「体幹」を鍛えるトレーニング方法（英語「体幹」トレーニング）を研究してきた。

そのような英語力の「体幹」を真に育成するには，既習事項を統合して活用するような，コミュニケーション

を積極的に行おうとする生徒の関心・意欲・態度を育てる必要がある。同様に，中学校学習指導要領の外国語科の目標には「外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，聞くこと・話すこと・読むこと・書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」とあり，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成が挙げられている。英語を用いて積極的に聞こうとする姿勢や話そうとする姿勢，すなわち会話を継続するための姿勢や技能なくしては，英語力の「体幹」も「コミュニケーション能力の基礎」を形成する本来の役割を果たす域に達し得ないと考えられる。

そこで英語の既習事項を統合する「体幹」を活用するために，相手の話を聞き，継続的に会話を続けていく姿勢や技能を「反応力」と呼び，英語による反応力を育成することが求められる。同時に，近年その導入が叫ばれるICTの英語授業における活用について検討してほしいという本学附属中学校英語科からの課題提示もあり，2013年度より本学大学院授業「教育実践フィールド研究」において「ICTを活用した英語教材の開発ー生徒の「反応力」の育成ー」と題する実践研究を開始した。本稿は2013年度と2014年度の取り組みを報告することを目的としている。²

1. 2 研究の目的と計画および概要

本研究では，ICTを活用した，英語反応力トレーニングの教材，そして英語「反応力」を育成するプログラムの開発を目的とし，おもに次のような研究計画を立てた。

- (1) 反応力の概念的枠組みの構築
- (2) 反応表現に関する中学校英語教科書分析
- (3) 中学校英語教科書にもとづく反応表現集の作成
- (4) 反応力トレーニング法の開発

*鳴門教育大学人文・社会系教育部

**鳴門教育大学大学院言語系コース（英語）

- (5) ICT を活用した反応力トレーニング教材の開発
- (6) ICT を活用した英語「反応力」育成プログラムの開発
- (7) 上記プログラムの実践

結果的には、ICT の活用以前に、そのコンテンツの開発が必要であると考え、同 2 年間の研究ではおもに「反応力」を育成するための指導教材およびプログラムの開発が実践研究の中心的な作業となった。具体的には 2013 年度は、英語授業で育成すべき「反応力」の概念化を行い、その概念にもとづき中学校英語教科書にみられる反応表現を分析し、反応表現集および英語「反応」トレーニング・ハンドブックを作成した（上記計画(1)(2)(3)(4)）。2014 年度はその成果と課題をふまえて、「反応力」の概念を明確化・具体化するために、反応力の CAN-DO リストを作成し、その能力を育成するためのトレーニング方法や教材、言語活動（英語でピンポン）から構成される「英語「反応力」育成プログラム」を考案し、本学附属中学校の英語授業において実践し、その成果と課題を分析した（上記計画(5)(6)(7)、ICT 活用は部分的）。

2. 「反応力」とは

2. 1 反応力の定義

反応力とは、相手の発話（言語的・非言語的）に対して、言語的・非言語的な手段を用いて応じることができる能力である。

特に 1 年目（2013 年度）の研究では、さまざまな反応行為があることをふまえ（c.f. 文部科学省, 2008b ; 太田・柳井, 2003）、反応力を 4 つの層に分類した。

< 反応力の 4 つの層 >

1. 相手の発話に意識を向ける
2. 相手の発話を促す
3. 相手の発話を理解する
4. 相手の発話に対して自分の考えを述べる

第 1 の層は、会話相手の英語発話をしっかりと理解しようとする姿勢という意味での反応であり、その姿勢は相手の目を見たり、うなずいたりという会話中の行為・態度に表れると考えられる。第 2 の層は、“Yes.” “I see.” “Really ?” “Great.” などの表現を用いて相づちをうち、相手の発話を促す反応行為である。第 3 の層は、相手の発話内容をよりよく理解するために、相手の発話について確認したり（“Can you say it again ?”）、詳細を尋ねたり（Can you tell me more ?）、さらに具体的な情報を求めたり（Who / What / When / Where / Whose / Why / How... ?）する反応行為である。そして、第 4 の層は、相手の発話について自分自身の考えや感想・意見などを示す反応行為である。1 年目の研究では、以上の反応力の 4 つの層にもとづき、英語教科書の対話テキストにおける反応表現を分析・整理し、反応力トレーニング法を考案した。

2 年目（2014 年度）の研究では、反応力を「相手の言ったことに対して、素早く応えることができ、話題を発展させ会話を続けることができる」能力と再定義し、反応力の下位技能として「瞬発力」と「持久力」に分類した。「瞬発力」とは、相手の発話（言語的・非言語的）に対して素早く的確に反応できる能力である。また「持久力」とは、相手の発話（言語的・非言語的）に対して自分の気持ちや考えを伝えたり、相手の考えや気持ちを引き出したりして話を続けていく能力である。これらの技能は明確に分かれるものではなく重なる部分もある。

2. 2 反応力 CAN-DO リスト

英語による反応力を育成するための指導プログラムを開発するにあたり、中学校学習指導要領に示された英語科の目標・内容との関連づけとともにプログラムにおける目標・授業・評価の一体化を図ることを目的に、反応力の CAN-DO リストを作成した（表 1 参照）。

特に、反応力は、中学校学習指導要領（外国語）に示された、「話すこと」「聞くこと」の 2 つの指導内容に関

表 1 英語「反応力」CAN-DO リスト

< 聞くこと > 表情や態度で相手の話の内容を分かっていることを示すことができる。	
< 話すこと >	
第 3 学年学習到達目標 ペアもしくはグループで、相手の言ったことに対して、素早く的確に受け応え、さらに内容を深めるために質問したり情報を付け足したりして会話をより長く続けることができる。	
瞬 発 持 久	a 3 相手の言ったことに対して素早く的確に受け応えができる。
	c 4 間を空けないように適切な表現を使うことができる。
	c 5 相手の言ったことに対して確認や同意などの表現を用いて相づちをうつことができる。
	d 3 質問や繰り返しを用いて相手から話を引き出すことができる。
	e 3 相手の言ったことに対して感想や意見や理由など情報を付け足して会話を続けることができる。
f (d + e + α) 相手の言ったことに対してさらに詳しい情報を得るために質問したり、考えを述べたりしながらお互いに理解を深め、会話を続けることができる。（注 α は、相手への興味・関心・理解など心の動きを表す。）	

第2学年学習到達目標	
ペアで、相手の言ったことに対して、素早く的確に受け答え、質問をしたり情報を付け足したりして会話を続けることができる。	
瞬発力	a 2 相手の言ったことに対して素早く的確に受け答えができる。
	c 2 間を空けないように適切な表現を使うことができる。
	c 3 相手の言ったことに対して賛成・反対・肯定・否定などの表現を用いて相づちをうつことができる。
持久力	d 2 相手の言ったことに対してさらに詳しい情報を得るために質問して会話を続けることができる。
	e 2 相手の言ったことに対して感想や意見や理由など情報を付け足して会話を続けることができる。
第1学年学習到達目標	
ペアで、相手の言ったことに対して正しく問答ができる。	
瞬発力	a 1 相手の言ったことに対して正しく受け答えができる。
	b 相手の言った内容が分からない時に1語か2語程度で聞き返すことができる。
	c 1 相手の言ったことに対して1語か2語程度で相づちをうつことができる。
持久力	d 1 相手の言ったことに対して質問をして対話を続けることができる。
	e 1 相手の言ったことに対して感想など情報を付け足すことができる。

わる。反応力とは「聞くこと」を大前提とする技能であるが、前述の「反応力の4つの層」に示される通り、相づち・確認・質問・感想や意見という行為が含まれているという点では「話すこと」に大きく関わる技能でもある。ここでは特に「話すこと」に関する技能を「瞬発力」と「持久力」という観点から項目化することにし、学年を通した到達度もふまえ、表1のようにCAN-DOリストを体系づけた。³

3. 「反応力」育成トレーニング法

3. 1 言語活動「英語でピンポン」

反応力を活用する場として、「英語でピンポン」という言語活動を考案した。この言語活動は、円滑な英語によるコミュニケーションを目指すためのゲームである。

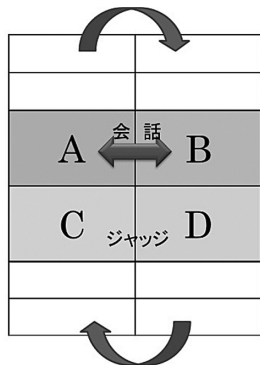


図1 「英語でピンポン」のローテーション

この言語活動は4人のグループで行われる。グループ内の2人が会話をしている間、残りのグループメンバーはジャッジの役をする。例えばAとBの生徒が会話をしている間はCとDがジャッジの役をする。ペアになった2人（AとB）は教師が指定した時間内（初級1分、中級2分、上級3分）英語で会話を続ける（図1参照）。どちらが先に会話を始めるかは、じゃんけんの勝敗によって決める。会話の始まりのあいさつと終わりのあいさつについては教師が指示を出す。

< 始めのあいさつ >

Hi, how are you? / I'm ~. How about you?

< 質問の始め方 >

I have a question. / Sure.

< 終わりのあいさつ >

Nice talking with you. / You too.

あいさつ後、相手にトピックに関する質問を投げかけ、その後は生徒が自由に会話を広げていく。トピックとそれに関する質問は教師がスクリーンに映す（図2）。

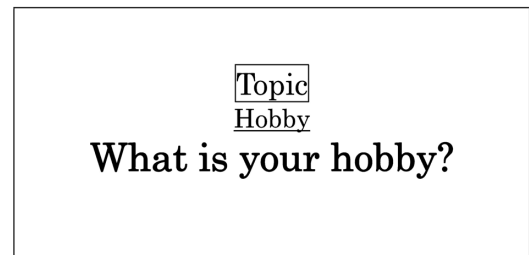


図2 トピックを掲示するスクリーンの例

会話中に沈黙が生じた場合（初級10秒、中級7秒、上級5秒）、その時に会話の主導権を握っていた生徒が負けとなる。また、会話中に、必要な英語表現や英単語が思いあたらず、日本語を補助的に使用したい時には、「ヘルプチケット」を使うことができる（上限は初級3枚、中級2枚、上級1枚）。

勝敗が確定後、ジャッジ役の生徒は会話終了した時の残り時間を記録用紙に記入する。会話終了したら、2列ごとに時計回りに移動し、ペアを変え順次会話を続けていく（図1）。

このような言語活動において、生徒には設定時間の間、会話を続ける「持久力」とともに、相手の発話に対してできるだけはやく反応する「瞬発力」が求められる。

3. 2 反応力トレーニング

言語活動「英語でピンポン」において求められる「瞬発力」と「持久力」を育成することを目的とするトレ

ニング方法を検討した。以下、それぞれのトレーニング法の具体を簡潔に示す。

3. 2. 1 瞬発力トレーニング

反応の瞬発力を育成するために、相手の発話（質問）に素早く答えるトレーニング法である。具体的には、ペアを編成し、一方の生徒に“Do you have any brothers or sisters?” “How many brothers/sisters do you have?” “Who is the tallest in your family?”といった質問文を並べたワークシートを配布し（付録参照）、質問文を読み上げさせ、もう一方の生徒は質問に対してできるだけ早く答えることが求められる。また、瞬時に反応する際に必要となる簡単な英語表現、例えば、挨拶のための表現（“How's it going?” “Not bad.” など）、リアクションのための表現（“That's great!” “Sounds nice.” など）、沈黙を回避するための表現（“You know...” “For example?” など）、確認のための表現（“What does that mean?” “Pardon me?” など）を集約したフレーズリスト（List of Phrases）を与え、発話と発話のあいだを埋めるための工夫の仕方を身につけさせる。

3. 2. 2 持久力トレーニング

反応の持久力を育成するために、相手の発話（質問）に答えた後に、さらにもう一言情報を付け加えるトレーニング法である。具体的には、上記瞬発力トレーニングと同じワークシート（付録）を用いて、瞬発力トレーニングと同じ方法で質問に答えさせ、さらにその答えに関する情報を付け足したり理由を述べたり具体例を示したりすることで、会話を続ける持久力を育成する。

3. 3 反応力育成プログラム

言語活動「英語でピンポン」において、相手の話を聞き、継続的に会話を続けることができる能力の育成を最終目標とし、瞬発力トレーニングと持久力トレーニングを行うという一連の流れを「英語「反応力」育成プログラム」としてまとめた。その具体的な内容は次の通りである（表2参照）。このプログラムは中学校2年生を対象とする3時間分の授業を想定して作成したものである。

表2 英語「反応力」育成プログラムの全体計画

全体目標	
◎相手の発話に対して、素早く応えることができ、話題を進展させ会話を続けることができる。	
<単元計画>	
時間	○ねらい・学習活動
1	○反応力への理解を深め生徒一人ひとりが自己の現状を把握し、必要な力を育成するために課題設定を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・反応力の定義を知る。 ・反応力がどの段階まで身についているか、CAN-DO リストを使用し自己診断を行う。 ・ICT による「英語でピンポン」のモデルを視聴し、実際にどのような表現が使われているかを知る。 ・ペアでモデルと同じトピックについて1分間会話し、実際に行った内容をグループ・全体でシェアを行い、今後自分に必要な力（反応力・語彙・表現・文法）は何かを知る。 ・反応力の定義を理解し、実際にペアでの会話を振り返りもう一度自己診断を行う。
2	○反応力育成に必要な能力を身につけるための練習を重ね、前時に設定した課題解決に迫れるようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・「英語でピンポン」の CAN-DO リストを用いて反応力の定義を再確認する。 ・コース（瞬発力育成コース、持久力育成コース、反応力育成コース）ごとに分かれてそれぞれの課題解決に迫るための練習を行う。 ・「英語でピンポン」の実戦を想定した練習を行う。 ・練習を通して自らの課題解決に迫れたかどうか自己診断を行う。
3	○自分で設定した課題を解決するために、「英語でピンポン」という活動を通して反応力を高め、相手の発話に対して適切に反応し、話題を進展させ対話を続けることができる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ペアによる英語ゲームにより会話をする雰囲気を作り、英語による描写に慣れる。 ・会話に必要な表現を学習する。 ・グループに分かれ英語でピンポンを行う。 ・「英語でピンポン」を通して自らの課題解決に迫れたかどうか自己診断を行う。

<生徒用 CAN-DO リスト>

第2学年学習到達目標	
ペアで、相手の言ったことに対して、素早く的確に受け応え、質問をしたり情報を付け足したりして会話を続けることができる。	
a 2	相手の言ったことに対して素早く的確に受け応えができる。
c 2	間を空けないように適切な表現を使うことができる。
c 3	相手の言ったことに対して賛成・反対・肯定・否定などの表現を用いて相づちをうつことができる。
d 2	相手の言ったことに対してさらに詳しい情報を得るために質問して会話を続けることができる。
e 2	相手の言ったことに対して感想や意見や理由など情報を付け足して会話を続けることができる。

4. 鳴門教育大学附属中学校における実践

4. 1 目的

前章に示した英語「反応力」育成プログラムを教育現場において実施し、その可能性と課題を検証することを目的とする。

4. 2 方法

鳴門教育大学附属中学校2年次生（一学級38名）を対象に英語「反応力」育成プログラムを実施した。具体的な実践の日程は次の通りである。

第1回授業： 2015年1月23日（50分）

第2回授業： 2015年1月29日（50分）

第3回授業： 2015年2月5日（50分）

4. 3 結果

4. 3. 1 第1回授業

第1回授業の展開は次の通りである。

1：趣旨説明

2：事前自己診断

3：「英語でピンポン」のモデル提示

（ICTの活用：スクリプト・つなぎ言葉の確認）

4：トピックを与えて実施

5：シェアリング

6：再実施

7：事後自己診断

また、授業後に確認した成果と課題は次の通りである。

＜成果と課題＞

- ・活動の趣旨を丁寧に伝えることができた。
- ・実際に活動を体験することで生徒自身の自己理解につながった。
- ・説明の簡略化、指示の徹底。
- ・教師の英語使用頻度。
- ・グループワークの方法に工夫が必要。
- ・時間配分（まとめの時間が不十分）の検討が必要。

4. 3. 2 第2回授業

第2回授業の展開は次の通りである。

1：CAN-DO リストの確認

2：目標提示

3：練習メニューの確認

4：各コースに分かれて練習

（瞬発力、持久力、反応力コース）

5：練習試合（英語でピンポン）

6：自己診断

また、授業後に確認した成果と課題は次の通りである。

＜成果と課題＞

- ・生徒理解が深まり、実態に応じた授業展開になっていた。

- ・それぞれの役割分担により、コースごとの練習がスムーズであった。
- ・コース別メニューの工夫（質問リスト等）
- ・コース活動のマネージメント
- ・指示の徹底。時間配分。
- ・教師の英語使用頻度。

4. 3. 3 第3回授業

第3回授業の展開は次の通りである。

1：ウォーミングアップゲーム

2：会話表現の復習

3：英語でピンポン

4：自己診断・アンケート

また、授業後に確認した成果と課題は次の通りである。

＜成果と課題＞

- ・ゲームの難易度をあげる必要がある。
（時間設定・ヘルプチケット）
- ・ゲーム性と会話の自然さのバランスを考慮する。
- ・記録用紙をわかりやすくする。
- ・アイコンタクトができていない。
- ・トピックのバリエーションが必要。

4. 4 自己診断データの分析

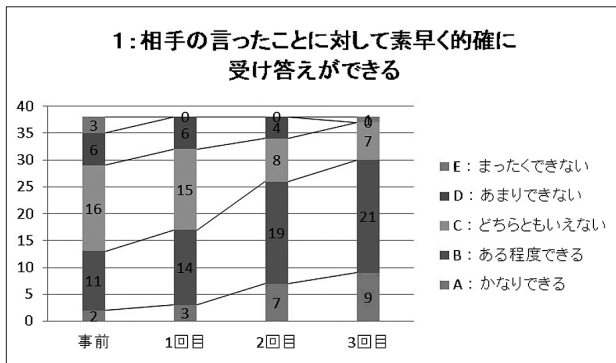
実践授業開始時および各実践授業終了時に、CAN-DO リストをもとに作成した自己診断シートを配布し、生徒に自身の反応力を診断させた。事後、自己診断データを集計・分析し、全3回の授業（反応力育成プログラム）の成果と課題を考察した。自己診断に用いた項目は次の通りである。

- ①相手の言ったことに対して素早く的確に受け答えができる
- ②間を空けないように適切な表現を使うことができる
- ③相手の言ったことに対して同意・反対・肯定・否定などの表現を用いて相づちを打つことができる
- ④相手の言ったことに対してさらに詳しい情報を得るために質問して会話を続けることができる
- ⑤相手の言ったことに対して感想や意見や理由など情報を付け足して会話を続けることができる

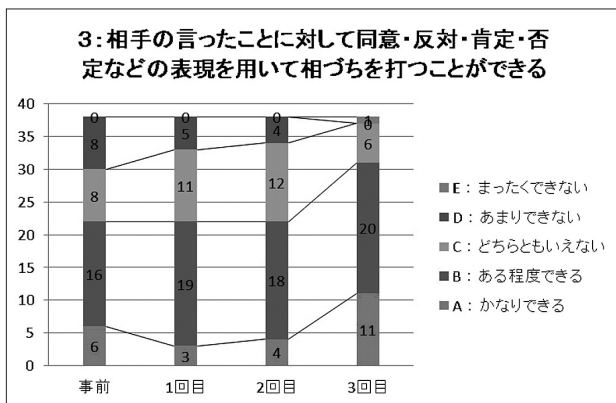
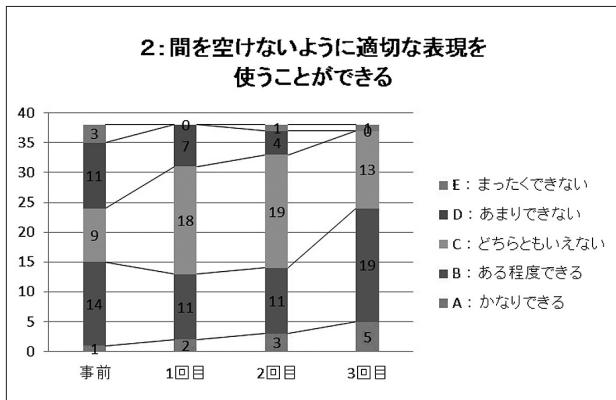
以上の項目について、5件法（A：かなりできる B：ある程度できる C：どちらともいえない D：あまりできない E：まったくできない）により生徒各自に適切な選択肢を選ばせた。

まず、項目①（相手の言ったことに対して素早く的確に受け答えができる）に関しては、「A：かなりできる」と「B：ある程度できる」を選択した生徒数が増加し（13→17→26→30）、「E：まったくできない」の生徒が0

になった。3回の授業を通して、相手の発話に対して素早くかつ的確に答えることに対する意識化が効果的に促されたことを示唆している。

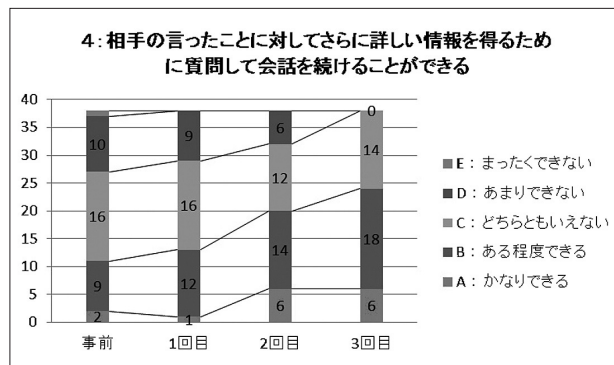


次に、項目②（間をあげないように適切な表現を使うことができる）と項目③（相手の言ったことに対して同意・反対・肯定・否定などの表現を用いて相づちを打つことができる）に関しては、1回目の授業の開始時（図の「事前」）と終了時（図の「1回目」）において、項目②は「B: ある程度できる」の回答数が、項目③は「A: かなりできる」の回答数が減少している（②: 14→11, ③ 6→3）。1回目の授業における「英語でピンポン」の試行やCAN-DO リストによる自己診断を通じて、自分自身の反応力の課題を的確に自己認識し、適切な目標設定がなされた結果であると考えられる。

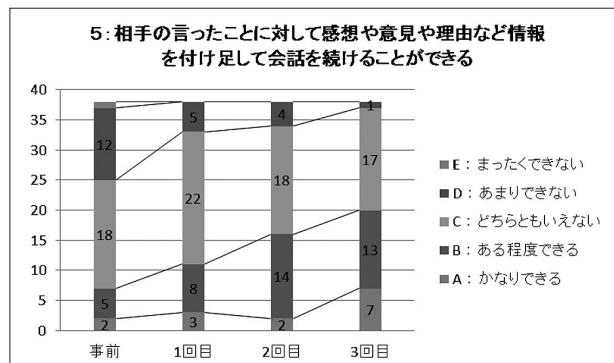


また、項目②も③も「A: かなりできる」と「B: ある程度できる」と回答した生徒数が第3回目に急増している。第1, 2回目授業における会話の定型の練習を重ねたことや、3回目の授業でフレーズ集（List of Phrases）を配布し、その適切な使用方法を提示したことが、項目②③の技能の向上を促したと考えられる。

そして、項目④（相手の言ったことに対してさらに詳しい情報を得るために質問して会話を続けることができる）については、「A: かなりできる」や「B: ある程度できる」と答えた生徒数が徐々に増加（11→13→20→24）している。2回目の授業時に質問リストを導入したことが、質問することによる会話の持続を促したものと考えられる。



最後に、項目⑤（相手の言ったことに対して感想や意見や理由などを付け足して会話を続けることができる）については、「A: かなりできる」と「B: ある程度できる」の割合が緩やかに増加しており（7→11→16→20）、3回の授業を通して同項目に示された技能ができるようになったとする意識が育ったことを示唆している。



ただし、他の項目に比べると相対的に「A: かなりできる」と「B: ある程度できる」の回答者数が少なく、また、自由記述欄の記載から、相手の質問に答えた後にさらに情報を付け加えることに難しさを感じている生徒が多くみられたことから、同項目の技能的難しさを読み取ることができる。

表2は、Can-Do リストの各項目（①～⑤）について、

「A：かなりできる」に5点、「B：ある程度できる」に4点、「C：どちらともいえない」に3点、「D：あまりできない」に2点、「E：まったくできない」に1点を与え、総合得点を生徒数（38名）で除すことで平均値を算出したものである（表3参照）。

表3 Can-Do リストの各項目の平均値

	事前	1回目	2回目	3回目
①	3.08	3.37	3.76	3.97
②	2.97	3.21	3.29	3.71
③	3.53	3.53	3.58	4.05
④	3.03	3.13	3.53	3.79
⑤	2.87	3.24	3.37	3.68

いずれの項目においても3回の授業を通じて数値が上昇したことを確認することができ、反応力に関する生徒の自己評価が高まったことを示している。特に第3回授業の平均値をみると、瞬発力（項目① 3.97、③ 4.05）の方が持久力（項目② 3.71、④ 3.79、⑤ 3.68）よりも相対的に得点が高い。これは持久力が瞬発力に比べて難しい技能であることを示唆するものである。

総じて、CAN-DO の5つの項目すべてにおいて生徒の自己評価が上昇したことを確認することができた。英語「反応力」育成プログラムを通して、反応力の重要さとその具体的な反応のあり方に関する生徒の意識を高めることができたと言えよう。また、瞬発力に比べて持久力の獲得が相対的に難しいという課題も確認された。

4. 5 「英語でピンポン」に関する意識調査

第3回授業の終了時に、アンケートを配布し、「英語でピンポン」および授業全体に関する生徒の意識を調査した。紙面の都合上、詳細は割愛するが、全体を通して生徒には好評だったが、「英語でピンポン」において扱ったトピックの選択、グルーピングやペアリングの方法について今後検討する必要があることが明らかとなった。

5. おわりに

本稿では、英語「反応力」育成のためのプログラム開発のための実践研究について報告した。最後に、今後の課題について主要と思われるもの3点を述べたい。まず、相対的な難しさが明らかになった「持久力」の育成のあり方の検討である。次に、トピックの選択やグルーピング・ペアリングのあり方などを含む「英語でピンポン」のルールを検討である。そして、今回十分な取り組みができなかった、授業におけるICTの活用について、「反応力」の育成と関連づけて検討していく必要がある。

注

1. 本稿は、2013年度および2014年度の鳴門教育大学大学院の授業科目「教育実践フィールド研究(英語)」において中学校英語チームによる実践研究の成果を報告するものであり、教育実践フィールド研究成果報告会（2014年4月16日、2015年4月15日開催）等における発表において使用された資料（掲示資料、配布資料）をもとに編集・執筆したものである。なお、本稿の内容に関わる一切の責任は同授業担当者の山森にある。
2. 2013年度の「教育実践フィールド研究(英語)」における中学校英語チームの構成員は宮川恵・宮本健一であり、2014年度は安達昇吾、遠藤麻央、木下泰徳、田所美穂、河村祥、久米明、高岡慶輔、寺尾順子、目崎美香、大和慧である。全員が授業実施当時、同大学院学校教育研究科教科・領域教育専攻言語系コース(英語)に所属の大学院生であり、それぞれが役割を分担し、本実践研究にあたった。
3. 英語「反応力」CAN-DO リストの作成にあたっては、文部科学省(2013)および高知県教育委員会編(2014, p.60; p.132)を参考にした。

謝辞

2013年度および2014年度の「教育実践フィールド研究(英語)」において、中学校英語チームの実践研究を行うにあたり、本学附属中学校英語科(当時)の藤井紀代美先生、西林悦子先生、藤田咲矢華先生に貴重な課題の提起およびご意見、ご助言をいただいた。この場を借りて、深く感謝の意を表したい。

引用文献

- 太田洋・柳井智彦. (2003)『英語授業改革双書No.45 “英語で会話”を楽しむ中学生－会話の継続を実現する KCG メソッド』東京：明治図書
- 高知県教育委員会. (2014)『高知県中学校外国語モデルプラン』Retrieved from <http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310301/eigokyouiku.html> (2016年2月12日)
- 文部科学省. (2008a)『中学校学習指導要領解説 外国語編』東京：開隆堂出版
- 文部科学省. (2008b)『中学校学習指導要領解説 国語編』東京：東洋館出版社
- 文部科学省. (2013)『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2013/05/08/1332306_4.pdf (2016年2月12日)

山森直人・石引英莉子・岩野真由美・長井志保・森川真由美・野中惇・下川理恵・トエスン リシャライチ・大牛英則. (2011)「中学校英語科授業のプラス1時間にどのように対応するかー英語「体幹」トレーニング法の開発ー」『鳴門英語研究』22, 13 – 24.

山森直人・伊藤晃浩・江川由美子・岡田朋子・木内千恵・齋藤麻由・福田佳代・吉田佑樹・吉住晃. (2012)「中学校英語科授業のプラス1時間にどのように対応するかー英語スキルアップトレーニング法の開発ー (その2)」『鳴門教育大学教育実践研究』11, 49 – 57.

山森直人・辰己明子・辻岡尚道・大牛英則. (2013)「中学校英語科授業のプラス1時間にどのように対応するかー英語スキルアップトレーニング法の開発ー (その3)」『鳴門教育大学教育実践研究』12, 65 – 73.

山森直人・乾美穂子・桑原崇文・藤川めぐみ・大牛英則. (2014)「中学校英語科授業のプラス1時間にどのように対応するかー英語スキルアップトレーニング法の開発ー (その4)」『鳴門教育大学教育実践研究』13, 63 – 73.

付録 質問リスト

瞬発力育成コースと持久力育成コースでは疑問文を作ることよりも質問に対して応えることや情報を付けたすことに重きをおいているため、その練習に特化したリストを作成した。

疑問文	日本語
1. Do you have any brothers or sisters ?	1. 兄弟か姉妹はいますか？
2. How many brothers/sisters do you have ?	2. 何人兄弟／姉妹がいますか？
3. Who is the tallest in your family ?	3. 家族で一番背が高いのは誰ですか？
4. Do you have any pets ?	4. ペットを飼っていますか？
5. When is your birthday ?	5. 誕生日はいつですか？
6. What is your hobby ?	6. 趣味は何ですか？
7. Where do you go shopping ?	7. どこに買い物に行きますか？
8. How often do you cook ?	8. どのくらいの頻度で料理をしますか？
9. What do you do in your free time ?	9. 暇な時に何をしていますか？
10. Do you like to go to karaoke ?	10. カラオケに行くことは好きですか？
11. What sports do you like ?	11. 好きなスポーツは何ですか？
12. Which subject do you like ?	12. 好きな教科は何ですか？
13. Who is your favorite singer ?	13. お気に入りの歌手は誰ですか？
14. Did you have a good holiday ?	14. いい休日を過ごしましたか？
15. Do you play basketball ?	15. バasketボールをしますか？
16. Where did you go in the winter vacation ?	16. 冬休みにどこに行きましたか？
17. What is your favorite book ?	17. 好きな本は何ですか？
18. What time did you get up today ?	18. 今日、何時に起きましたか？
19. How long did you sleep last night ?	19. 昨夜、どのくらい眠りましたか？
20. Did you eat breakfast this morning ?	20. 今朝、朝食を食べましたか？
21. How do you come to school ?	21. どうやって学校に来ていますか？
22. What musical instrument can you play ?	22. 何か楽器を弾けますか？
23. How far is it from here to Tokushima Station ?	23. ここから徳島駅まではどのくらい遠いですか？
24. Where is your favorite place in Tokushima ?	24. 徳島のお気に入りの場所はどこですか？
25. What do you think about Tokushima ?	25. 徳島についてどう思いますか？
26. What club do you belong to ?	26. 何部に所属していますか？
27. How many books do you have ?	27. 本を何冊持っていますか？
28. Which cartoon character do you like better, A or B ?	28. A と B のどっちが好きですか？
29. Do you want to go abroad ?	29. 海外に行きたいですか？
30. What do you want to be in the future ?	30. 将来何になりたいですか？

会話の流れ (反応力育成コース&練習試合用)

・ 始めのあいさつ A : Hi, how are you? B : I'm ~. How about you?	・ 質問の始め方 A : I have a question. B : Sure.	・ 終わりのあいさつ A : Nice talking with you. B : You too.
--	---	--

*紙面の都合などの理由で、授業において実際に使用した質問リストを改編している。